

# 論点整理① -教育内容-

---



令和5年4月25日  
京丹後市教育委員会事務局・市長公室

# 本市が目指す教育・人材育成像の方向性

- 本市が目指す教育・人材育成像の方向性を、丹後ちりめんに準え、経糸と緯糸で捉え直し、当該方向性を地域全体で共有し、本市の教育・人材育成の経糸と緯糸を紡いでいくこととする。

緯糸の  
考え方

## 【変遷するもの】

グローバル化といった社会の大きな趨勢と、それに対応する教育・人材育成の新たな施策を指す。

経糸の  
考え方

## 【不易的なもの】

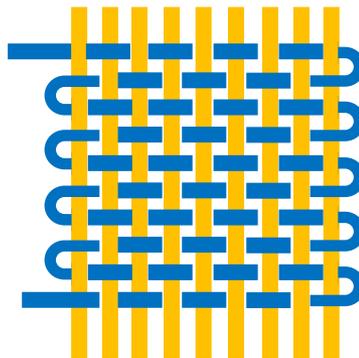
社会や教育現場の昨今の変化の中にあっても大きく変わらない地域固有の価値を指す。

## ■ 人材像

世界を舞台に活躍することができる  
とともに、地域に還ったり、域外から地  
域に関わったりすることも通じて、未  
来を創っていく人材

- ✓ 丹後人や日本人として世界で渡り合うことができる人材
- ✓ 地域の良さを域外に発信することができる人材

- ✓ 地域の良さを理解し、地域に戻ってくる  
ことができる人材
- ✓ 地域の外にいても、持続的に地域にか  
かわることができる人材



## ■ 教育像

テクノロジーの活用によりSociety5.0に  
対応しつつ、京丹後市固有の伝統・  
文化・暮らし等の地域資源を通じて更  
なる付加価値を共創していく教育

- ✓ GIGAスクール構想を基盤としつつ、  
STEAM教育や英語教育、アントレプレ  
ナーシップ教育等のSociety5.0に対応し  
た教育

- ✓ 地域固有の伝統・文化・暮らしや特筆す  
べき技術等のこれまで地域で培われてき  
た地域資源を活用した教育



# 本市の目指す人材像に求められる資質能力の例(イメージ)

- ・ これからの時代に求められる資質能力の一部※を船に喩え、各資質能力の位置づけを可視化している。
- ・ その上で、社会を生き抜く力の育成に向けて、保幼小中一貫教育を核とした魅力的な事業・教育活動、地域に開かれた学校、安全・安心な学校づくりを進めてきており、高等学校教育に繋げて、資質能力を育てていくことが重要である。

※必要な資質能力の全体像を示したものではない点に留意。

## 社会を生き抜く力

相互理解  
共感性

コミュニケーション  
協働性

創造性  
柔軟性

英語運用能力

## 丹後学・Kyotango Sea Labo

- 郷土への愛着と誇り
- 自らの生き方・あり方の思考
- 人間中心の発想法(デザイン思考)
- 自らの創造性に対する自信向上 etc.

- キャリアに対する意識変革
- 社会変化に対する受容力 etc.

### 【アントレプレナーシップ教育】

- 諸領域を横断・統合しながら問題を発見・解決していく力
- 科学的・客観的な根拠に基づいて論理的に考え、表現する力 etc.

### 【STEAM教育】

- 目的意識をもった行動力
- 情報を適切に収集・分析・活用する力 etc.

### 【探究的な学び】

## 言語能力

母国語 & 外国語(英語)  
語彙力・理解力・表現力・多文化理解 etc.

## 非認知能力

自己肯定感・積極性・粘り強さ・向上心・挑戦心・リーダーシップ etc.

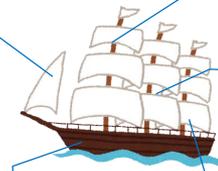
船体の行先の決定

【フォアマスト】  
船体の前進力の創出

【メインマスト】  
船体の安定性の確保

【ミズンマスト】  
船体の舵取り等

船体の基盤



- 令和の日本型学校教育が目指す学びとして、「個別最適な学び」と「協働的な学び」※を一体的に充実していくこととされており、こうしたことを前提としながら、本市の目指す人材像の育成に必要な資質能力を育んでいくことが重要である。

## 個別最適な学び

### 【指導の個別化】

全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

### 【学習の個性化】

言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

## 協働的な学び

探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

※出典：文部科学省

- このため、準備会において設定した検討事項について、既存の枠組みにとらわれることなく、当事者である子供の視点や本市独自の地域性の観点を踏まえた議論を行う。

### ＜検討事項＞

- ✓ 地域資源を織り込んだSociety5.0に対応する教育内容【本日】
  - STEAM教育やアントレプレナーシップ教育、グローバル人材育成、デジタル人材育成等の教育課程における体系的な再構築
  - 上記のSociety5.0に対応する教育と丹後学等の地域に根差した教育を融合するための具体的な方策
- ✓ 教育効果と地域の付加価値を最大化するシームレスな制度の在り方
- ✓ 地域・産業界と連携した教育・人材育成の在り方



# 標準授業時数について

## 標準授業時数の位置付け

標準授業時数は、学習指導要領で示している各教科等の内容を指導するのに要する時数を基礎として、学校運営の実態などの条件を考慮して国が定めたもの。

小学校・中学校・義務教育学校・中等教育学校の前期課程では、学校教育法施行規則において、教科等ごと、学年ごとに標準授業時数を定めている。

各学校においては、標準授業時数等を踏まえ、学校の教育課程全体のバランスを図りながら、児童生徒・学校・地域の実態等を考慮し、学習指導要領に基づいて各教科等の教育活動を適切に実施するための授業時数を具体的に定め、適切に配当する必要がある。

## 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (令和3年1月26日中央教育審議会答申)(抄)

### 第Ⅱ部 各論

#### 2. 9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について

##### (2) 教育課程の在り方

##### ③ カリキュラム・マネジメントの充実に向けた取組の推進

(略)

○ 標準授業時数については、学習指導要領に示す各教科等の内容の指導の質を担保するための、いわば量的な枠組みとして、教育の機会均等や水準確保に大きな役割を果たしてきた。特に資質・能力のうち、定量的に質を測定できるのは知識・技能等の一部にとどまることから、学習指導要領が求める教育の質を量的に支えるものとして標準授業時数は重要な意義を持っている。

○ 一方で、標準授業時数の在り方をめぐっては、児童生徒や教師の負担について考慮すべきとの指摘や、学習状況に課題のある児童生徒も含めて指導すべき内容を一般的に教えることが可能なものとなっているのか、ICTを活用した学習指導を踏まえた柔軟な在り方について検討が必要、といった指摘がある。

(略)

○ また、学習指導要領のねらいとする資質・能力の育成と、一定の総授業時数の確保による教育の機会均等の観点を踏まえ、総枠としての授業時数(学年ごとの年間の標準授業時数の総授業時数)は引き続き確保した上で、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成や探究的な学習の充実等に資するよう、カリキュラム・マネジメントに係る学校裁量の幅の拡大の一環として、教科等の特質を踏まえつつ、教科等ごとの授業時数の配分について一定の弾力化が可能となる制度を設けるべきである。その際、この制度を利用する学校は、家庭・地域に対して特別の教育課程を編成・実施していることを明確にするとともに、他の学校や地域のカリキュラム・マネジメントに関する取組の参考となるよう、教育課程を公表することとするべきである。

(出典)文部科学省



# 学校教育法施行規則に定める標準授業時数

## 小学校の標準授業時数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	306	315	245	245	175	175
社会	-	-	70	90	100	105
算数	136	175	175	175	175	175
理科	-	-	90	105	105	105
生活	102	105	-	-	-	-
音楽	68	70	60	60	50	50
図画工作	68	70	60	60	50	50
家庭	-	-	-	-	60	55
体育	102	105	105	105	90	90
特別の教科 道徳	34	35	35	35	35	35
特別活動	34	35	35	35	35	35
総合的な 学習の時間	-	-	70	70	70	70
外国語活動	-	-	35	35	-	-
外国語	-	-	-	-	70	70
合計	850	910	980	1015	1015	1015

備考

- 一 この表の授業時数の一単位時間は、四十五分とする。
- 二 特別活動の授業時数は、小学校学習指導要領で定める学級活動(学校給食に係るものを除く。)に充てるものとする。
- 三 第五十条第二項の場合において、特別の教科である道徳のほか、宗教を加えるときは、宗教の授業時数をもつてこの表の特別の教科である道徳の授業時数の一部に代えることができる。(別表第二から別表第二の三まで及び別表第四の場合においても同様とする。)

## 中学校の標準授業時数

	1年	2年	3年
国語	140	140	105
社会	105	105	140
数学	140	105	140
理科	105	140	140
音楽	45	35	35
美術	45	35	35
保健体育	105	105	105
技術・家庭	70	70	35
外国語	140	140	140
特別の教科 である道徳	35	35	35
総合的な 学習の時間	50	70	70
特別活動	35	35	35
合計	1015	1015	1015

備考

- 一 この表の授業時数の一単位時間は、五十分とする。
- 二 特別活動の授業時数は、中学校学習指導要領で定める学級活動(学校給食に係るものを除く。)に充てるものとする。

(出典)文部科学省



# 本市の教育課程の編成状況(中学校の例)

・本市の中学校における教育課程の編成については、国が定める標準授業時数に則った編成となっており、その中で学校ごとの方針に沿った取組を行っている。

## A 中学校

学年	時数	教科										総合 学活	合計	特活		合計				
		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語	道徳			総合	学活		合計	特活		合計
																		生徒会活動	学校行事	
1年	実績	146	113	152	122	48	47	111	75	150	35	52	53	1104	2	12	1118			
	標準との差	6	8	12	17	3	2	6	5	10	0	2	18	89						
2年	実績	146	116	120	146	42	39	111	76	155	35	70	46	1102	2	11	1115			
	標準との差	6	11	15	6	7	4	6	6	15	0	0	12	88						
3年	実績	107	140	144	141	39	35	109	41	141	35	71	38	1041	2	28	1071			
	標準との差	2	0	4	1	4	1	4	6	1	0	1	3	27						

## B 中学校

学年	時数	教科										総合 学活	合計	特活		合計				
		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語	道徳			総合	学活		合計	特活		合計
																		生徒会活動	学校行事	
1年	実績	140	113	140	115	50	47	107	75	147	35	50	42	1061	2	20	1083			
	標準との差	0	8	0	10	5	2	2	5	7	0	0	7	47						
2年	実績	147	111	119	140	39	42	108	70	148	36	70	50	1080	2	18	1100			
	標準との差	7	6	14	0	4	7	3	0	8	1	0	15	65						
3年	実績	107	140	140	140	35	38	105	35	140	35	70	50	1035	2	38	1075			
	標準との差	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	15	17						

## C 中学校

1年	実績	143	111	146	109	50	47	109	73	143	35	50	46	1062	3	17	1082
	標準との差	3	6	6	4	5	2	4	3	3	0	0	12	48			
2年	実績	147	116	119	146	38	39	110	76	145	35	70	46	1087	3	14	1104
	標準との差	7	11	14	6	3	4	5	6	5	0	0	12	73			
3年	実績	106	140	140	140	35	35	106	38	140	35	70	37	1022	3	34	1059
	標準との差	1	0	0	0	0	0	1	3	0	0	0	2	7			

## D 中学校

1年	実績	144	120	142	113	48	49	105	81	152	36	61	57	1108	1	22	1131
	標準との差	4	15	2	8	3	4	0	11	12	1	11	22	93			
2年	実績	142	115	111	142	44	43	106	80	152	35	74	53	1097	2	23	1122
	標準との差	2	10	6	2	9	8	1	10	12	0	4	18	82			
3年	実績	106	140	141	140	41	39	105	36	144	36	70	42	1040	2	39	1081
	標準との差	1	0	1	0	6	4	0	1	4	1	0	7	25			

## E 中学校

1年	実績	142	107	142	117	47	51	105	75	145	38	52	44	1065	5	18	1088
	標準との差	2	2	2	12	2	6	0	5	5	3	2	9	50			
2年	実績	141	109	111	141	38	47	106	74	140	36	79	43	1065	5	19	1089
	標準との差	1	4	6	1	3	12	1	4	0	1	9	8	50			
3年	実績	112	140	142	140	35	38	105	38	142	36	71	37	1036	5	37	1078
	標準との差	7	0	2	0	0	3	0	3	2	1	1	2	21			

## F 中学校

1年	実績	144	110	145	116	47	46	110	74	147	37	55	36	1067	4	7	1078
	標準との差	4	5	5	11	2	1	5	4	7	2	5	1	52			
2年	実績	142	112	115	142	37	38	109	74	146	36	78	40	1069	4	8	1081
	標準との差	2	7	10	2	2	3	4	4	6	1	8	5	54			
3年	実績	111	143	142	143	40	37	108	37	145	36	72	38	1052	4	8	1064
	標準との差	6	3	2	3	5	2	3	2	5	1	2	3	37			

※令和3年度実績



# 本市の特徴的な取組例 -総合的な学習の時間-

- ・「ひと・みず・みどり 市民総参加で飛躍するまち」京丹後市の学習を通して郷土への誇りと愛情を育て、地域を通して自己の生き方・あり方を考える学習として、平成28年度から市内全小中学校で実施している。
- ・現在、モデルカリキュラムの改訂を行っているところであり、より探究的な学びへの転換が求められている。

## 平成28年度版「丹後学モデルカリキュラム」に基づく各校の授業実践【概要】

### 【ねらい】

- 京丹後市に対する関心・愛着
  - 京丹後市についての知識・理解
  - 市民としての自覚、実践的な態度
  - 問題解決を通じた生き方・あり方の探求
- の4観点で設定。さらに、そのそれぞれについてⅠ期～Ⅲ期の指導目標を設定

### 【対象学年】

小学校3年生から中学校3年生

### 【指導時間】

「総合的な学習の時間」の中で、年間15～20時間程度を実施

- (例) 5年「うまいはずだ！丹後米」 全26時間
- ・丹後米に興味をもち、学習課題をたてる。 2時間
  - ・調べる方法の計画と情報収集をする。 2時間
  - ・課題別に解決する方法を考え情報を収集する。 10時間
  - ・調べたことを整理・分析する。 5時間
  - ・丹後米のPRを考え、発信する。 6時間
  - ・学習したことを振り返る。 1時間

### 【各学年の必須指導内容】

- 小学校3年生 …農業・漁業・伝統文化等、校区の特色
- 小学校4年生 …丹後ちりめん / 2分の1成人式 / (地域の発展に尽くした先人)
- 小学校5年生 …(市の米作り)
- 小学校6年生 …山陰海岸ジオパーク【大地の学習】
- 中学校1年生 …市の観光 / (市の機械金属工業)
- 中学校2年生 …職場体験 / 立志式
- 中学校3年生 …市の将来への提言



市の米作り(稲刈り体験)



山陰海岸ジオパーク【大地の学習】



地域の環境保全(海岸清掃)



地域の事業所見学



地域の特色(古墳)



お魚料理教室(トビウオ料理)



夢未来式(2分の1成人式)

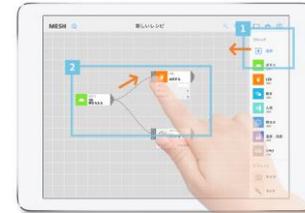
# 本市の特徴的な取組例 -技術・家庭の時間-

- 生徒が自ら問題を提起し、その解決について、友達との対話を通して対策を提案する発展的なプログラミング教育の実現を目指し、初心者でも簡単にプログラミングができる「MESH」を活用している。
- 今後は共通テストにおいて情報が新設されることとなっているなど、プログラミングやデータサイエンスに必要な統計処理、情報リテラシーの知識等が重要となってきている。

## 中学校（第3学年）技術分野「計測・制御のプログラミングによる問題解決」単元 MESH（アプリ・機器）を活用した授業

計測となるブロック

1時	計測と制御とは何か	iU講師の講義(オンライン)による動機付けを行う。 MESHの使い方を学習する。
2時	MESHを使った制御	MESHで信号機を作成する。 簡単なプログラミングを学習する。
3時	課題解決のアイデア探し	以下を満たすように話し合いを行い、設計書を作る。 ① 順次、反復、分岐を意識している。 ② 社会からの欲求(満足度)、安全性、環境への負荷、経済性を考えている。 ③ 目新しさ、社会に役立つものを考えている。
4時	プロトタイプ作成	作成後、教員等に批評やアドバイスを求める。
5時	改善作業・発表準備①	アドバイスを受け、改善を繰り返す。
6時	改善作業・発表準備②	発表練習を行う。
7時	発表	発表を行う。振り返りを行う。



制御するiPad用アプリ

### 学習指導要領 技術分野「D情報の技術」内容及び時数

- 基礎的な技術の仕組み及び情報モラルの必要性 …第1学年：年35時間中9時間
- 双方向性のあるコンテンツのプログラミングによる問題解決…第2学年：年35時間中6時間
- 計測・制御のプログラミングによる問題解決 …第3学年：年17.5時間中13時間

技術分野「D情報の技術」において、上記(1)(2)(3)の内容を指導することが位置づいています。京丹後市中学校教育研究会技術部では、中学校3年「計測・制御のプログラミングによる問題解決」の力を身に付けさせるため、「生活に役に立つものを作ろう」をテーマに、MESHを活用し、ペアでアイデアを出し合い、試行錯誤を繰り返しながらプログラミングを行い、オリジナル製品を創り上げる単元計画を作成しました。

本部会の公開授業では、オリジナル製品について「発表する側」と「聞く側」（評価する側）にわかれ、ローテーション形式で発表会を実施しました。発表する生徒は相手意識をもち、製品のセールスポイントを生き生きと説明し、発表を聞いて評価する生徒は、「社会からの欲求（このアイデア面白い!）」、「安全性（利用者または環境にとって安全!）」、「経済性（役立ちそう、便利で欲しい!）」、「プログラミング（こうなっていたのか、なるほど!）」という4つの視点で評価していました。和やかな雰囲気の中で、「主体的・対話的で深い学び」が実現された授業でした。公開授業後の事後研究会では、「授業が楽しかった。」「参観された先生方に褒めてもらえてとても気持ちがよかった。」という生徒の声が多かったと、授業者から報告を受けました。生徒が解決したい問題を見だし、問題解決の過程を充実させることができた成果であると考えています。



人が通過したら信号を返る



組み合わせて様々な課題解決に利用

#### アイデア例

- ・二度寝防止
- ・応援えんぴつ(→集中して学習)
- ・落ち込んだときに気力を上げる
- ・親が来たらずら知らせてくれる
- ・ゲームのしすぎ防止
- ・電気代を通知
- ・防犯対策
- ・花の水とり
- ・熱中症予防
- など



# 教育内容に係る主な論点

## 1. Society5.0に対応した教育内容

### 主なご意見

- 緯系の「地域の良さを域外に発信」や「STEAM教育、アントレプレナーシップ教育」を京丹後市の経系「地域の良さの理解」「地域資源の活用」によって、中身を組立てて京丹後市ならではの方向性を見出すのがよい。
- GIGAスクール構想と学校との関係をどのようにしていくのかを考えていかなければならない。GIGAスクール構想により、先生の学習観、学力観、指導観変えていくことが重要である。
- 細かい指示を多くすると、シングルな作業はできるが指示を待つチームになる。しっかり自らが考え仲間同士助け合うようなチームをつくる教育を、GIGAスクールと文部科学省の「個別最適な学び」は目指している。これを京丹後で行い、京丹後で学ばばイニシアチブを自分が持っている子どもたちが思えるような教育にしていきたい。
- シリコンバレーでイノベティブな活動をしている人々を調査・研究した成果をプログラム化した「Kyotango Sea Labo」のような教育課程外の取組を、公教育の中に入れていくことができればよいのではないかと。
- グローバルな活動とは、新しいものを獲得していくような活動であり、対してローカルな活動は、地域に埋め込まれているものを改めて自覚し、それを大切にすることである。京丹後市出身者として、これらの活動をあわせ持てる人材がグローバルリーダーと言える。グローバルリーダーを駆動させるエンジンにあたるものがアントレプレナーシップであると認識している。
- 地理的な制約をオンラインとのハイブリッドや、ある種学びの市町間で遠隔地同士の連携ができないか。また、地域プレイヤーの持続可能な巻き込みという点では、善意に頼り続けるということだけではなく、例えばアントレプレナーシップで言えば年齢に関係なく、小学生から高齢者まで学べるオープンスクールのような場を作るのもおもしろいのではないかと。
- 子供のころからデジタルに慣れ親しんだ若者が、新しい発想や機械を駆使して技能を継承して発展させることが、これからの製造現場の大きな目標であり、丹後地域だけでなく日本のモノづくりの課題だと感じている。

### 議論のポイント

- ✓ 学ぶワクワク感や教科の学びが自ら設定した課題を探究する上で生きるという実感が持てるような教育内容やその重点化をどのように考えるか。
- ✓ その上で、本市における教育課程の現状を踏まえつつ、STEAM教育の教育課程への取り込み、英語教育やデジタル教育、アントレプレナーシップ教育の在り方をどのように考えるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用



# 教育内容に係る主な論点

## 2. 地域に根差した教育内容

### 主なご意見

- 学校や教育委員会だけでなく、地域の視点も入れることで、「この地域だからできる」という教育をつくっていく必要がある。
- 地域以外の「資源」は限定的であり、地域内の「資源」は豊富であるが十分活用できていないとなっているが、それらの「資源」が具体的に何をさして、なぜ限定的で、十分活用できていないのか。また、それをICTの活用で解決できるのかを検討するとよいのではないか。
- 緯系の「地域の良さを域外に発信」や「STEAM教育、アントレプレナーシップ教育」を京丹後市の経系「地域の良さの理解」「地域資源の活用」によって、中身を組立てて京丹後市ならではの方向性を見出すのがよい。【再掲】
- 丹後学は一定の成果はあるが、京丹後市をどうしたいのかということまでの学びをできているかは自問している。
- 都道府県立高校と地域、市町村の連携協働が必要である。教科の中の学びだけでなく、それと社会とのつながり、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが必要だと感じて教科の学びに帰ってくるといった循環を引き起こしていくことが重要である。
- 子供たちが地域を出ていくのは高校卒業時であり、それまでに地域のことを学んでもらうことが重要であるため、飯田市では市と高校が協定を結び、地元の方と一緒に地域人の育成のためのカリキュラムを作成した。
- 飯田市においても義務教育と高校教育には壁があったが、学校教育ではなく社会教育の観点からかわることにより、社会教育を通じて地域と学校を結び付けることで地域人材育成のカリキュラムを作成した。
- どのように地域の素材を学校現場に落とし込めるかが重要であり、地方から特色のある教育にしていきたい。
- 丹後ならではの自然にもっと触れて学べる環境や、オーケストラやジャズ、落語、映画等芸術鑑賞の機会を増やし、印象に残るような学業の時間があるとよい。

### 議論のポイント

- ✓ 本市が「有している資源」と「有していない資源」とは何か。丹後学にはそれらの資源をどのように活用していくべきか。
- ✓ 「1. Soicety5.0に対応した教育内容」と「2. 地域に根差した教育内容」を丹後学の中でどのように具体化を図っていくことができるか。また、そのための総合的な学習の時間の在り方をどのように考えるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用



# 教育内容に係る主な論点

## 3. 義務教育から高校教育まで意識した教育の在り方

### 主なご意見

- 京丹後市で育つ子供がどのような学びでどのような知識やスキルを身につけ、そして目指す人材像は何なのか、という点を就学前から高等教育まで一貫したものを教育者と地域が共有することが重要である。
- 高校が義務教育の取組の流れをしっかりと受け止めていくことが重要である。
- 都道府県立高校と地域、市町村の連携協働が必要である。教科の中の学びだけでなく、それと社会とのつながり、地域を窓にして社会や世界とつながっていく、学んだことを社会で実際に活かしてみる、いろいろな体験をしてもっと学ぶことが必要だと感じて教科の学びに帰ってくるといった循環を引き起こしていくことが重要である。【再掲】
- 京丹後市をベースに考えた場合、強み・活かせるソースとしては、京丹後市特有のちりめんなどの伝統的産業、あるいは観光等の復興が予測される産業に加え、高校の専門科が結構あるため、小中学生の巻き込み先として高校の専門科が連携しやすいのではないかと感じる。また、グローバルやデザイン思考等のプログラムで育まれているので、連携できることが多々あるのではないかと感じる。
- 子供たちが地域を出ていくのは高校卒業時であり、それまでに地域のことを学んでもらうことが重要であるため、飯田市では市と高校が協定を結び、地元の方と一緒に地域人の育成のためのカリキュラムを作成した。【再掲】
- 飯田市においても義務教育と高校教育には壁があったが、学校教育ではなく社会教育の観点からかかわることにより、社会教育を通じて地域と学校を結び付けることで地域人材育成のカリキュラムを作成した。【再掲】

### 議論のポイント

- ✓ 義務教育において身に着けた資質能力を一層伸ばしていくためには、設置者の異なる高校教育へどのようにつないでいくことが考えられるか。

※主なご意見については、準備会におけるものを引用

